

——どうして花には、そういう伝達力や人をつなぐ力があるのでしょうか。

「人間にとって非常に象徴的な存在だからと思います。人の心を表したり、国さえも象徴できたりする。戦場に花は似合わないし、咲くこともできない。すなわち平和の象徴でもあります。花が咲くことができるのは、環境が保たれているというパロメーターでもある。私たちは、そんな花の見えない背景にも思いをはせているのです。」

「目に映るのは、きれいな花一輪かもしれないけれど、どういう背景で育ってきたのか、曲がっている枝や節は、風が吹いたせい、か、激しい雨が降ったためか、土壌がやせていたのか。日が当たらなかつたのかどうか。そうした見えない積み重ねがあつて、花は咲き、今がある。思いを寄せて、共感する。そうした作業がとても大切です。」

——たとえ同じ種類の花でも、一つとして同じ花ではない、と。

「日本だけでなく、世界で格差や排除がまかり通るようになってきました。強者の論理が横行し始めています。それは、互いの違いを見ないところから始まったのではないのでしょうか。別の人格、別の人生、違うんだ、ということを前提に何かをするのと、自分と違うものは間違いだと思つては、結

果が全く異なつてきます。最初から違つたことを承知していれば、相手を知ろうという興味や尊敬や敬意も生まれてくるでしょうし、自分自身はどうあるべきかを考えるきっかけにもなるでしょう。現代の社会が違いを前提としていない、知ろうとしない社会だとすれば、己以外は敵、とても窮屈で住みづらい時代だと思います。」

——強者といえは、安土桃山期を生きた初代専好が豊臣秀吉らに披露した「大砂物」という松の大作の話を知りました。昨年、映画化もされましたが、背後に猿が戯れる絵が掛かり、大閻をいさめたともいわれます。

「資本主義の社会ですから、そうした物差しがあつてもいいでしょう。しかし、物差しは一つだけじゃない。違う尺度があるのが世の中だと思つて大切ですよ。それを一番実感できるのが、文化の世界だと思つて。複眼的な見方や多様性の大切さを提示する一助になれます。室町時代、生け花の思想や技法をまとめた池坊専応は『壊れた器や枯れた枝にも価値がある。風が吹いて花が散り葉が落ちることは、単に季節が移つただけではなく、命が移り変わつていくこと。すべてこの世は無常と悟ることもできる』と、その書『口伝』で述べています。『枯れた花にも華がある』という教えは、生きとし生けるもの、すべてに価値があり、意味があり、美があるという、多様性のすばらしさを説いているのです。」

「大砂物が『池坊一代の出来物』と称賛された、と記録に残っていますが、いさめたかどうかは分かりません。ずいぶん大胆なことをしたなと思つていますが、その後、子孫も続いているから一族郎党皆殺しにはなつていない。代々、池坊は京都の町衆の中で、融通無碍に生きてきたので、権力者につくとか、離れるとかはなかつたでしょう。ただ、位人臣を極めた人の出世をたたえたという見方もありますが、『人に戻れよ』と言いたかつたのかもしれない。」

——いま、米国と北朝鮮がならみ合い、開戦前夜のような緊張にあります。中東でも一触即発という声もある。人と人をつなぐのが花を生ける人の役割なら、トランプ米大統領と金正恩朝鮮労働党委員長にはどんな花を生けますか。

「それ、困りますね。でも、やはり立花を生けると思つて。池坊の生け花には生花、自由花などいくつかの形があります。花器に様々な花を生ける立花は音楽にたとえるとオーケストラ。多種多様な花を使い、それぞれの枝や花が、各自の個性と働きを持ちながら、お互いを生かし合つている。そして一つの理想とする調和した形を作り上げているのです。違いを認め合い、支え合うことで実現される世界。立花という様式を持つ哲学、理念をお二人に知って頂きたいと思つて。それぞれの存在と働きを存分に生かし合いつつ、対峙ではなく、一つの時空をともにして調和を作り出す。しよせん花ですが、されど花の示すメッセージです。」

(聞き手 編集委員・駒野剛)

「入手しやすい草花で生けました。生け花は伝統文化でありながら、誰もが親しむ生活文化です」  
—佐藤慈子撮影

# 一輪一輪の美 互いを認め合い 調和する世界へ

